

# 大乘唯識思想の成立

——ツォンカパ所引の『中辺分別論』所説を通じて——

片 野 道 雄

仏陀以来の仏教思想の展開としてそれぞれの時代にもたらされた言教は、それぞれの時代社会に繰り広げられた仏教思想領域を如実に示している。初期大乘仏教の時代においてもそのことは大乘諸経典の上に窺われると共に、またナーガールジュナ、アーリヤデーヴァ、アサンガ、ヴァスバンダなどの伝えられる著作においても顕著なものが知られる。それら經典と論書とはその性格を異にするとは言え、それらの大乘諸経典はもとより、それぞれの論書が著作せられてきた動向としては、その時代における仏陀の本意としての仏教開顯という仏道に集約できるのではないかと思われる。また、特に論書においては、合理的批判精神でもって伝統的な言教の言葉を超えてでも仏陀精神の核心に直参せんとした求道の跡が窺われることでもある。唯識思想もかかる動向の上に窮められていると言えよう。

ところで、チベットにおける仏教の伝承にあつて、西暦十四・五世紀に在した仏教者ツォンカパ(宗喀巴・Tsong kha pa, 1357-1419)の偉業もまた、単にチベット仏教内にとどまるものではなく、広く大乘仏教思想史の上からも仏教展開の核心に呼応せるものがあると言えよう。因に、その偉業は、ツォンカパを祖師とするゲルクパなる黄帽派仏

教団を中心としたその後のチベット仏教者に多大な影響を与えていることによっても推察されるが、また、代表的

な著作の一つである大乗仏教概論『了義未了義論 善説心髓』(Orani Nos. 6142, 10103, 10132, 10135, Toh. No. 5396, Tokyo Nos. 41, 42) においてもその時代社会を背景とした著者独自の仏教学の取り組みを通じて窺われるのである。

直前に述べるツォンカパの著書名の上に「了義・未了義」という言葉が用いられているのであるが、ツォンカパの、まさしくその了義未了義という言葉について了解しているところとしては、

言教の示されるままにその意味を別様に導くことができなく、意味が確定している (artha-niyata) という点で了義 (mīta-ārtha) 、また、示されるままにその意味が考えられることは不適當であって、その深意を解説して他の意味に導く必要があること、或いは、言葉通りに考えてよいとしても、そのみでは究極的な真実ではなく、それ以外に更にその真实性が求められるべきであるから、その意味が導かれるべきもの (artha-netavya) である点より未了義 (neya-ārtha) である。

という説明文の上に見ることができ<sup>①</sup>。かかわる未了義という視点から論究されようとするツォンカパのこの著作の趣意は、冒頭の造論の詩頌において端的に表明しているかと思われる。すなわち、

多くの教誡を聞き、理証上の正しい方法についても多くの労によっていて、現觀の徳の聚をもって劣ることがない多くの人々が、更に努力しても未だ理解されていない、その「大乗仏教の了義未了義の」根拠が、<sup>②</sup> 師なる文殊の御恩によってよく見られる。よって、殊に慈愛の思いから「それについて」私は述べる。「仏陀」所説の真実を理解するという思索をもって無比なる説明を望む人々は敬うて聞きなさい。<sup>③</sup> (第八偈)

と述べている。また、

それら「了義未了義の」二つの判断も亦、これは未了義である、これは了義である、と説かれている聖教のみによっては不可能である。<sup>④</sup>

とし、従って言教の、

その意味を決定的なものにする証明としての理証によって、よく思惟されている方〔すなわち、ナーガールジュナ、アサンガ、ヴァスバンドゥなど偉大な学識〕にしたがって、「大乘仏教の」密意を探究すべきであるから、最終的には汚れを離れる道理性をもって〔その了義未了義性が〕判断なされるべきである。<sup>③</sup>

とも述べているように、この著作の序文から窺われる了義未了義論は、単に仏陀以来の言教を並列的に掲げて、それらの優劣を論ずるといふ性格のものではなく、初期大乘仏教者がそうであったように、ツォンカパも、ツォンカパのその時代の仏教思想領域にあって、改めて、ナーガールジュナ、アサンガ——ヴァスバンドゥの両思想を講究することを通じて、大乘仏教の開頭を志向しているものと考えられる。

さて、ツォンカパの『了義未了義論』はそのような志向に基づいて大乘中観、並びに大乘唯識の両思想の了義性が論究されようとしているのであるが、大乘唯識仏教の了義性を考察するに当ってはツォンカパは、主に『解深密経』の三性三無自性に関わる経文を教証としている。<sup>④</sup> それらの経文によって了義未了義として安立される方軌としては、言教について、諸存在のそれ自身独自の固有の本質的な特質あるものとして成り立つものと、成り立たないものとが善分別され、あるがままの如性において実在性の有、無が誤認されることなく正しく了知されるかどうかによるのである、として、即ち、三時の転法輪の所説にそれについての視点がおかれていると言えよう。ことにツォンカパは『解深密教』所説の、

私の密意にして甚深なる教説が如実に了知されないでその教法を信頼している。然もこれらすべてのものは正さに無自性であり、不生であり、不滅であり、本来寂靜であり、自性涅槃であるという教えの意味を言葉通りにはかり執着している。彼等はそのことによって、すべてのものについて無という見解や無相という見解に至ることになる。無という見解、無相という見解に至って、更にすべてのものにおけるあらゆる相を損滅し、諸存在につ

いての構想分別されたもの（遍計所執）の特質をも損滅し、諸存在についての他なる条件に依存するもの（依他起）の特質を、そして、完成されたもの（円成実）の特質をも損滅するのである。それはどうしてかと云えば、勝義生よ、何となれば、依他起の特質と円成実の特質とが実在するのであるならば、遍計所執の特質もまた了知されることになるであろう。それについて、凡そ依他起なる存在相と円成実なる存在相とにおいて無相を見る彼等にとっては実に遍計所執なる存在相をも損滅するからである。それ故に、彼等は三種の存在相をもに損滅するといわれる。

に言及しているように、<sup>⑤</sup>大乘唯識の了義性は三性説に基づく大乘の無自性・般若空なる教法の密意の開頭に視点がおかれようとしている。然るに、無自性・般若空義が顕わなるものとなるところには、無なるものを有と誤認したり、或いは、実在なるものを無と誤認するという増益と損滅との二つの極端な一辺倒なる誤認が善分別されることにもなるとして、ツォンカバのこの『了義未了義論』における大乘唯識の了義性の解明としては、具体的にはその増益と損滅との両極端な誤認の仕方を吟味検討することに主眼がおかれて、特に、『瑜伽師地論』の「菩薩地」や「撰決択分」、『大乘莊嚴經論』、『中辺分別論』を基本的な論書として順次章節を改めて取り上げ、それぞれの論書に基づいて論究が進められているのである。

## 二

『中辺分別論』の中に説かれる仕方」という章節の許に掲げている『中辺分別論』の詩頌としては、第一章相品の第一偈及び第二偈をもって代表せしめている。この章節の冒頭に次のように述べている。

『中辺（分別論）』の中に、

虚妄なる分別はある。そこに二つのものは存在しない。しかし、そこ「すなわち虚妄なる分別のなか」に空性が

存在し、その「空性の」なかにまた、かれ「すなわち虚妄なる分別」が存在する。(第一偈)

それゆえに、すべてのものは空でもなく、空でないのでもないといわれる。それは有であるから、また無であるから、さらにまた有であるからである。そしてそれが中道である。(第二偈<sup>⑥</sup>)

と説かれている。初めの詩頌によって空性の相が、第二「偈」によってそれが中道として示された。<sup>⑦</sup>

これら二つの詩頌については既に先覚によって、第一章相品の中核であるばかりでなく、全論の基調となるものである、とせられているのであるが、ツォンカバにとっても、正さしくそのような『中辺分別論』に対する了解がその背景にあったものと思われる。ツォンカバはそれらの詩頌の許の長行に基づき、第一偈は空性思想を、第二偈は中道思想を表明するものであるとする。そのことは仏教伝統の主要な課題である両思想の上に大乘唯識の了義性が究明されるものであることを内意しているのであろう。更に続いてツォンカバは、その第一偈について、

そこで、ある場所にあるものがないとき、前者「すなわちある場所」は後者「すなわちあるもの」としては空である、「というように」また、「空であると否定された後にも」なお「否定されえないで」何らか余ったものがここに有るならば、それこそは今や実在なのである、というように、有、無を如実なるままに知るのが、空性への顛倒なき悟入として説かれている。従ってこ「の第一偈」はそれ「空性への正しい悟入」を示さんがために空性が明らかに述べられたのである。<sup>⑧</sup>

と説明している。このような了解は、『中辺分別論』相品第一偈下の二つの説明文からなる長行の中、後半の説明文に基づいている。第一偈の許の長行の後半の説明文の中に見られる引用の言葉については既に近年先覚によって、ニカーヤなど原始仏典に求められることが指摘され、更には大乘瑜伽唯識思想の上にまで展開してきた様相が詳しく究明されているのであるが、ツォンカバは、原始仏典以来の伝承という点には特に言及することなく、長行及びスティラマティの註釈に基づいて第一偈の解明がなされている。

ツォンカパによって改めて確認されているところとしては、第一偈は、大乘の基本として展開する、大乘至極としての空性への顛倒なき悟入のために、空性の正しい相がきわめて簡潔な詩頌によって了義なる様相をもって示されているとするのであって、第一偈下のその長行は空性への顛倒なき悟入を述べるものであり、第一偈はまさしく、有無を如実なるままに知るといふ菩薩の実践を通じて、空性の正しい相が表明されているものとせられる。ツォンカパは更にその第一偈及び長行について説明を加えている。長行において「ある場所にあるものがない」というその、（一）

ある場所とは、空の事体であり、それは虚妄なる分別であり、すなわち依他起である。あるものがない、といわれる無ということは所取能取なる別個の二つの実体「について」であり、すなわち遍計所執である。「従って第一偈のb句にいう」そこに「二つのものは」存在しない、とは、前者なるか「の依他起」が後者なるか「の遍計所執」として空であると述べているのである。それ「遍計所執にして二として構想分別されたもの」がないとき、（二）「その否定された」場所に余れるもの、即ち残されたその実在なるものは何であるか、と考えるならば、「第一偈a句にいう」虚妄なる分別はある、といわれ、また、第三句「の、しかしそこに空性が存在し」は依他起と円成実との二つ「が実在」であると述べているのであり、第四句はある別の疑いを断つのである。（三）と述べて、また、ステイラマティの註釈に基づいてこの第一偈について論究している。（四）

その註釈に見られる四種の解説の中、ツォンカパは第一番目の解説にもとづいて、即ち、すべてのものは兎角のよう<sup>⑩</sup>に自性が全くないと考える損減論を遮するために第一句が、又、虚妄なる分別の実在をいう場合、經の中に、すべてのものは空である、と説かれるものと矛盾するのではないか、という疑いを断つために第二句が、そして、第一句第二句が示されてくるとき、空性は無となるであろう、という疑いに対して第三句が、しかも、二としての空が虚妄なる分別においていつもあるならば、何故に空ということが常に了解されていないか、という疑いを除くために第四句がおかれている、と説く解説によっている。（五）

また、第二偈についてもその許の長行及びスティラマティの註釈に基づいて述べているのであるが、それについて、「空でもない」は円成実に対して、「空でないのでもない」は依他起と遍計所執について述べるものであるという一類の解釈、或いは、虚妄なる分別と空とを別個のものとして解釈することはヴァスバンドゥなどの考え方に反するものでもあると述べ、また、スティラマティが説明する「迦葉品」の中道思想所説について、他の中観派の人々の考えるように、「中辺分別論」より「迦葉品」が勝れていると考えるとしても、唯識のこの筋道こそ中道の意味を開顕するものであり、唯識の方軌による限り、それら二つは同義となされるべきであるとも言及している。

後のチベットにおける註釈書にはこの第一偈について、第一句は初転法輪を、第二句は第二時転法輪を、第三第四句によって最後の転法輪を示すものであるという理解も見られるが、そのような理解が如何なる唯識学の伝承によるか、その事情は詳らかでない。

### 三

『中辺分別論』相品第一偈の許の長行に見られるニカーヤ以来の所説は既に先覚の指摘する通り『瑜伽師地論』の「菩薩地」の中にも知られる。ツォンカバによってもその所説は、この『了義未了義論』の本章の冒頭において論究する「菩薩地に説かれる仕方」という条項下で、重要視して適用されている。

ツォンカバは「菩薩地真実品」第四に相当する箇所における、空性を悪取する損滅という誤認の仕方を述べる文章を引用し、更に空性をよく理解する行き方として次のように述べている。<sup>①</sup>

前者〔ブドガラを見解とする者〕は知るべきものに対してただ迷妄のみにあるが、すべての知るべきものを損滅して、更に空性をよく理解する行き方として次のように述べている。<sup>①</sup>

後者〔ブドガラを見解とする者〕はそれら〔ブドガラを見解とする事柄についても無頓着とならない。けれども、後者〔の空を悪く取らえる者〕はそれら〔ブドガラを見解とす

る者」より反対になるからである、というように「菩薩地」の中に説かれている。と述べ、

以上の如くであるから、凡そある場所にあるものが無いとき、前者「すなわちある場所」は後者「すなわちあるもの」として空であり、「空であると否定された後にもなお否定されえないで何らか」余ったものが実在する、とこのように見る者は空性に顛倒なく悟入するのである。

といて、「菩薩地」の所説が適用されている。そして、更にその個所に続く「菩薩地」の所説にもとづき、

色などの「構想される」事体がそれらなるものとして言葉によって概念の設定された自体としては空である、というの「直前に述べる」前半の言葉「すなわち、凡そある場所にあるものが無いとき、前者すなわちある場所は後者すなわちあるものとして空である、という言葉」の意味であり、「空であると否定された後にもなお」余ったものが実在するというのは、概念の設定の根拠であるただ事体なるもののみ (astumatra) やただ概念の設定のみ (prajñaptumatra) は有る、というように「菩薩地」の中に説かれている。従って、凡そあるものが空であるというの「遍計所執をいうのであり、その空の事体は依他起であり、前者「すなわち遍計所執」として後者「すなわち依地起」が空であるという、その空が円成実である。それら「三性という点から」の有、無の意味は先に説明した如くである。以上のように、無なるものを有と誤認する増益の極端なるものが断ぜられるのが有の辺「が断ぜられるのであり」、そして、有なるものを無と誤認する損減の極端なるものが断ぜられるのが、無の辺が断ぜられるということである。従って、それによって二として無ということが顕わとなってくるのでもあり、このような空性がまさに勝義のきわめられたものとして説かれている。即ち「菩薩地」の中に、「先の「有なる」もの」とこの無なるものとの両者の有、無から解放された教法の特相をもって撰約されているその事体は二として無である。二として無なるは二辺を断じたこの上ない中道である」と述べているのである。



といつて、この条項での論究を結んでいる。

前上によって窺われるように、『中辺分別論』の長行に見られるニカーヤ以来の所説に対するツォンカパの適用とこの「菩薩地」に基づく適用とにおいて些さか、その表現の相違を見るのであるが、そこに用いられる趣意としては同じ了解の仕方にあると言えよう。しかも、そのニカーヤ以来の所説の上に三性思想を言及しているのであるが、それについても同様の説明がなされている。その場合、ある場所にあるものがない、即ち、依他起において遍計所執がないということは、ステイラマテイの註釈に基づいて、比丘の居住する寺院にして、比丘がいなくなって寺院が残るというようなあり方で、比丘と寺院とを並列して、一方の否定による他方の有、あるいは、そのようなあり方で空の開頭が考えられるべきでないとし、また、インド仏教以来よく用いられる喩であるが、ツォンカパによつても、繩なるものにして、暗がりや蛇だと怖れる世界（遍計所執）に対して、目覚めて蛇が否定されて繩と知られる世界がもたらされるところに、依他起の有、あるいは、空性思想が了解されようとしている。

#### 四

以上、大乘唯識の了義思想を解明せんとするツォンカパの著述に基づいて、『中辺分別論』相品第一・第二偈、及びその許の長行について些さか考察してきたのであるが、それらの詩頌は、仏教伝統の無自性・空性思想、或いはそこに展開する中道思想の中に、了義なるものとしての大乘唯識の基本的立場が打ち立てられていることを改めて知るのである。しかもそこには、その時代における仏教思想領域にあって大乘唯識の成立事情が窺われてくることでもある。殊に第一偈下のニカーヤ以来の伝統を伝える長行はその事情を内示しているものと考えられる。そこに見られる「如実なるままに觀察し (yathābhūtaṁ samanupāsyaṭi) 如実なるままに知る (yathābhūtaṁ prajānati)」という実践の上に、了義として的大乗唯識思想が表明されようとしていることは重ねて述べるまでもないが、それはまた、唯識思

想の形成されてきた一動向を物語るものであり、その思想構造を論理的に明確化する三性説の成立する要因ともなっているであろうと思われる。ここではツォンカパの了解する三性説の論理構造全体を委細に検討するに至らなかったが、すべてのものは無自性・空であるという大乘の密意の開頭として、了義なるものとして提示せられる大乘唯識思想はツォンカパの所述からも知られるようにその三性説を基盤として成立していると言えるのであろう。

本稿は昭和五十七年十二月の大谷大学仏教学会例会に於いて発表したものに若干加筆したものである。

#### 註

- ① 直前の引用はラムリムチェンモの取意、*Peking vol. 153, 130-2-4-3*。長尾雅人『西藏仏教研究』一〇七一—一〇八頁参照。
- ② 拙稿「ツォンカパ造了義未了義論の試解(一)」『大谷大学研究年報』第三四集、五〇頁参照。
- ③ 右『年報』五一頁参照。
- ④ 右『年報』五二—七二頁参照。
- ⑤ 右『年報』六〇頁参照。
- ⑥ 『大乘仏典』（中公公論社）一五卷所収の長尾雅人訳参照。
- ⑦ 影印北京版、一五三卷、一七七—四一—三。
- ⑧ 影印北京版、一五三卷、一七七—四一—三—四。
- ⑨ 長尾雅人「空性における余れるもの」長尾『中観と唯識』五四二頁以下、向井亮『瑜伽論』の空性説—『小空経』との関連において—『印仏研』二二—二二号、三六八頁以下参照。
- ⑩ 影印北京版、一五三卷、一七七—四一—四—六。
- ⑪ 前掲『大谷大学研究年報』七七頁以下参照。